

福澤諭吉先生第 118 回忌法要、記念講演会

故郷の中津市では、2月3日福澤先生のご命日に、118回忌法要が明蓮寺で行われました。先祖代々の墓前には、中津市長奥塚正典氏をはじめ、市民の皆さん、慶応医療学部山内慶太教授、福澤諭吉保存会の皆さん、慶応OBが訪れ、手を合わせておられました。この日は、東京の麻布山善福寺でも、社中の大勢の方がお参りされるので、福澤先生は大空を忙しく往き来されているのではと、寒椿の咲く境内から青く澄み渡る空を見上げました。法要後は、山内慶太教授の記念講演「福澤諭吉にとっての明治元年（慶応4年）—明治150年に際して—」が行われました。

記念講演は、慶応四年、鳥羽伏見の戦いから、明治改元の日本で福澤先生がどのように考えられ、行動され、日本の国に影響を与えられたのか「慶応義塾之記」「福翁自伝」より、丁寧に読み解き説明されました。混乱の日本で富国強兵には、人物を養育すること、同じ志を共にする人々と慶応義塾を立ち上げ、社中と名付けられた福澤先生のお気持ちについても触れられました。蘭学の修行を重ね西洋の学問、社会の仕組を直接体験、吸収され、日本の国の独立、それを支えるのが個々の人々であることの重要性も説かれています。独立の気力では、本塾の教員小幡仁三郎の一言を引用され、独立自尊の重さが伝わってきました。将来を託す子らに分かりやすく学問を繋げるには、西洋学を五七調に伝える工夫もされていたそうです。

「慶応義塾紀事」では、学問の事と政治の事とは全く縁なきものにして、学問の政治からの独立についても触れられています。二つの自負では、洋学の命脈を守る。世の中に、いかなる騒動や変乱があっても、慶応義塾は洋学の命脈を絶やしたことがない。そして、これからも日本の洋学の火を絶やさず、その歴史を受け継いで欲しいと願っていた。「蘭学事始再版之序」について、先人が苦勞して翻訳したターフルアナトミア、解体新書を騒乱中の世の中だからこそ、木版に保存する安全な方法は無いと福澤先生が再版にご尽力されたということ。講演を拝聴し、歴史背景、教育のあり様、先人たちの努力によってその精神が慶応義塾で受け継がれているのだと感動しました。



ご命日には、琴の追善演奏があります。これは、福澤先生が江戸、東京に出られてから鳴物が好きになり、ご家族も熱心な三曲党のご家庭だったことから、福澤先生みずから箏曲「六段の調べ」を弾かれた経緯で、ご命日には琴の追善演奏がされるそうです。

福澤諭吉旧居福澤記念館では、福澤諭吉と西南戦争～西郷隆盛と増田宋太郎をめぐる～企画展を開催中です。NHK Eテレ「先人たちの底力 知恵泉」で福澤諭吉先生が放送されます。日時、平成30年2月13日（火曜）午後10時から10時45分。番組内では、福澤記念館所蔵の資料や福澤旧居が紹介されます。

※ 記念講演会資料一部抜粋。

渡邊 郁美

